

第1回 全国都市緑化かわさきフェア基本計画懇談会 議事録

1 開催日時 令和3年8月31日（火）午前10時30分～正午

2 開催場所 川崎市役所 第3庁舎18階 大会議室

3 出席者

福田紀彦 川崎市長

<懇談会委員>

池田航介 Perma Future 代表

蕪木沙耶 令和3年成人式サポーターグループ

佐土原 聡 横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院 教授

鈴木賢二 川崎商工会議所 専務理事

反町充宏 一般社団法人 川崎市商店街連合会 理事・青年部長

田代直輝 セレサ川崎農業協同組合 営農経済本部 販売対策部 都市農業振興課 課長代理

萩原ひとみ 一般社団法人 川崎市観光協会 理事

涌井史郎 東京都市大学 特別教授

和城信行 神奈川新聞社 川崎総局長

渡辺広之 京都芸術大学芸術教養センター 客員教授

<オブザーバー>

野村 亘 国土交通省 関東地方整備局 公園調整官

<共催者>

棚野良明 公益財団法人 都市緑化機構 専務理事

<事務局>

磯田博和 川崎市建設緑政局長

木村博彦 川崎市建設緑政局緑政部担当部長

藤島直人 川崎市建設緑政局緑政部緑化フェア推進担当課長

- 4 内 容
- (1) 開 会
 - (2) 市長あいさつ
 - (3) 委員の紹介
 - (4) 全国都市緑化かわさきフェア基本計画の策定に向けた取組状況について
 - (5) 意見交換
 - (6) その他
 - (7) 閉 会

- 5 配布資料【資料1】全国都市緑化かわさきフェア基本計画の策定に向けた取組状況について
【参考資料1】話題提供資料
【参考資料2】全国都市緑化かわさきフェア基本構想懇談会における意見と対応
【参考資料3】全国都市緑化かわさきフェア基本構想
【参考資料4】全国都市緑化かわさきフェア基本計画懇談会 委員名簿
【参考資料5】全国都市緑化かわさきフェア基本計画懇談会開催運営等要綱
- 6 公開・非公開の別 公開
- 7 傍聴人の人数 1名
- 8 発言記録 次のとおり

〔（１）開会〕

○木村担当部長

それでは、定刻になりましたので、ただいまから「第１回全国都市緑化かわさきフェア基本計画懇談会」を開催いたします。

本日は、お忙しい中、当懇談会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。私は、当懇談会の進行を務めさせていただきます、建設緑政局緑政部担当部長の木村と申します。どうぞよろしくお願いいたします。それでは、以降着座にて進行させていただきます。

新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策といたしまして、検温、手指消毒、マスク着用に御協力いただきありがとうございます。マスクを着用している関係で、若干発言等、お聞き苦しい場面もあろうかと存じますが、御理解くださいますようお願いいたします。

まず、議事に先立ちまして、本日の懇談会は、川崎市審議会等の公開に関する条例に基づき、公開とさせていただきます。また、本日の会議録に個々の発言者氏名を記載することをあらかじめ御了解ください。なお、本日の傍聴者は、１名です。併せまして、事務局以外の本市職員も出席しておりますことを御了承ください。

それでは、会議に先立ちまして、資料の確認をさせていただきます。本日の次第、座席表に続きまして、

- ・資料１　Ａ３よことじ

「全国都市緑化かわさきフェア基本計画の策定に向けた取組状況について」

- ・参考資料１　Ａ４よことじ　「話題提供資料」

- ・参考資料２　Ａ４たてとじ

「全国都市緑化かわさきフェア基本構想懇談会における意見概要と対応」

- ・参考資料３　Ａ４よことじ

「全国都市緑化かわさきフェア基本構想」

- ・参考資料４　Ａ４たて

「全国都市緑化かわさきフェア基本計画懇談会 委員名簿」

- ・参考資料５　Ａ４たて

「全国都市緑化かわさきフェア基本計画懇談会開催運営等要綱」

を机上に配布させていただいております。

資料の不備などがございましたら、会議の途中でも構いませんので、事務局までお申し出くださいますようお願い申し上げます。

それでは開会にあたりまして、福田市長より御挨拶申し上げます。福田市長、よろしくお願いいたします。

〔（２）市長あいさつ〕

○福田市長：

皆様おはようございます。本日は、お忙しい中、御出席いただきまして誠にありがとうございます。また、昨年に引き続き委員に御就任いただきましたことに心から感謝申し上げます。

基本構想を基に今年度は基本計画の策定に入っていくわけですが、基本構想を基に国とも今、

開催に向けて協議を進めさせていただいておりまして、これから基本計画の策定に向けて、皆さまの闊達な御意見をいただき、より良いものを作り上げていきたいというふうに思っております。

今朝、庁内の局区長が集まる会議がありまして、その中の報告で、ある区のアンケート結果について、面白いものがありましたので紹介させていただきます。

幸区というところがありまして、幸区の高校生、市立高校が2校あるのですが、その生徒さんたち約750名にアンケートを取りました。何を取ったかという、ボランティアについてということなのですが、ボランティアに参加したことがありますか、あるいは興味がありますか、というようなアンケートを取っているのですが、皆さん想像以上に関心があって、そして、気持ちが前向きということで、「興味がありますか？」というアンケート結果として、「ある、どちらかといえばある」が56パーセントあるんですね。今まで参加したことがあるという方は3割くらいなんですけども。興味があるのだけど、まだその機会に恵まれていない、というふうな方たちがいて。

今まで「どんなことに興味がありますか？」という中に、「花に水をやる」、「ごみを拾う」などと答えている方が、なんとほぼ同率一位ぐらい多いのです。意外なのが、「小学生と遊んだり、部活動の内容を伝えてあげたい」ということが、全体にですね、子どもたちのボール遊びをなんとか地域の中でやらせてあげたいな、ということで高校生にも意見を求めたら、高校生が、「私たちが面倒見てあげる」というふうな意見があって、そんなことがあるのかと。高校生が、小学生と遊びたいかと。おじさんの感覚からいうと「へっ？」という感じだったんですけど、改めてこういうアンケートを取ってみると、子どもたちとすごく交じり合いたいということ、自分たちのやっていることを小さな子どもたちに伝えてあげたいという意味がすごくあるということに正直驚きました。

私たち行政で考えると、固定的な観念、こことここは合わないだろうなどと勝手に考えたりするのですが、子どもたちはそれ以上のことをいろいろ考えている。ボランティアのことについても、大人以上にものすごく前向きにやってみたいと。社会貢献したい、地域の役に立ちたい、あるいは地域の活動にもっと参加したいという意思があることを私たちが受け止められてきたかという、今現状そういうふうに受け止められていないというのが現状だというふうに思います。

今回の市制100周年という大きな節目の中で緑化フェアをやる、というのは実はものすごく大きな意味があって、「みどり」というものを媒介にして、といった言い方が正しいか分かりませんが、みどりのつながりで、私たちの行動が変わって、いろいろなつながりというものが生まれてくる。そしてその行動の変化というものが、やがてレガシーとして文化に変わっていく、川崎ではこんなことになったのか、というふうなかたちにつながる取組を、みんなで考えながら実行に移してしていきたい、と思っています。

ですから、私自身が大きな反省なのですけれども、「この人たちはこういうものだよね」、というステレオタイプな見方は絶対に避けなければならないな、と。もっともっと多くの人たちを巻き込むためには自由な発想でより新しい人たちの意見も加えながら、ということを考えていかなくてはいけないというふうに思わせていただきました。

本日も、多様で多才な方々が揃っておりますので、ぜひ忌憚のない御意見をいただき、基本計画の中に盛り込んで、いい形に巻き込んでいければな、と思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

○木村担当部長：

ありがとうございました。福田市長におきましては、引き続き、懇談会に御出席いただきますので、よろしくお願いいたします。

〔（３）委員の紹介〕

（委員の紹介～省略～）

〔（４）基本計画の策定に向けた取組状況について〕

（資料１の説明～省略～）

〔（５）意見交換〕

○木村担当部長：

それでは、意見交換をさせていただきながら、さらに掘り下げさせていただければと存じますので次第５、意見交換に移りたいと存じます。

先ほど、事務局より説明させていただきました資料につきまして、委員の皆様から御意見をいただきたいと思います。

御意見がある方は挙手をお願いします。

それではまず、委員の皆様おひとりおひとりから御意見を頂戴したいので、こちらから指名をさせていただくということをお願いしてよろしいでしょうか。

大変恐縮ですが、私の左手から順番にということで、池田委員からお願いしてもよろしいでしょうか。

○池田委員：

池田です。よろしくお願いいたします。資料を拝見させていただきました。前回と比べて具体的な事業があって、すごく進んでいるなど感じております。

一つ思ったことは、いろいろな事業が進んでいるなど思っていて、その前提として、脱炭素社会の実現、カーボンゼロを目指している、というところで、2030年とか2040年というところで、どのくらいまで具体的に出していくのか、みんなでやる共通の目標があるとより分かりやすいと思いました。具体的にいうと、カーボンゼロもちろんそうですけど、エコロジカルフットプリントといって、自分の暮らしがどれくらい環境に影響を与えているのかという指標が、日本全体で2に対して、川崎ではそれが限りなく1に近いという状態だと、本気で環境問題に取り組んでいるのだな、という姿勢がうかがえるなどと思いますし、何年までにこれを目指していこうという指標があると、より環境に対して緑化フェアをやる意味が、みんなに伝わるんじゃないかと僕は思いました。以上です。

○木村担当部長：

ありがとうございます。続きまして、蕪木委員お願いいたします。

○蕪木委員：

よろしくお願いします。懇談会の方で、各テーマの特徴を引き出しつつ、全市で一貫性を持たせるとことや、水辺を生かしたまちづくりといった点を提案させていただいたのですが、会場イメージのところに大きく反映していただいて、多摩川、二ヶ領用水で会場を結び全市的なつながりを感じられるというのは、非常にいいと感じています。

川崎は、歴史の中で二ヶ領用水とともに発展したまちということで、そういった背景もくみ取られているので、川崎らしさがよく表現されているな、と思っています。その他、エリア同士をつなぐ、ということに関しては、スタンプラリーのようなものを実施して、それぞれの会場をつなぐいろいろな仕組みづくりや、各会場をつなぐ多摩川、二ヶ領用水での全市的な取組に一体感を感じるような形にできたらな、と思います。二ヶ領用水の水辺では生きものの観察ツアーだったり、水辺の植生などが学べるイベントを開催したり、教育面だったり、二ヶ領用水沿いに子どもたちが作った竹とんぼのようなものを置いてみたり、灯りを設置して夜の出展も楽しめるような演出をしてみたり、話題提供資料にもあったような、川でのシェアサイクリングを推進してみたり、といった観光面を含めた多面的な水辺の活用ができればいいなと思っています。

エリアごとの展開、取組の推進というのは、これから具体的に決定していくと思うのですが、開催目的にある「みどりが果たす新たな役割」を創出してライフスタイルを提示する、ということに関しては、今非常に需要が高まっているアウトドアとかにも関連して、家でアウトドアアクティビティを行ったり、みどり豊かなワーキングスペースを推進したりだとか、ワークショップとか講座を開催するなどして、目的に対して具体性を高めていくということが重要になってくるかなと思っています。

資料1の事業イメージにある広報宣伝ということでは、SNSの活用ということについて、若者の意見としては、やはりSNSから情報を得るという機会は多いと思っているので、戦略的な広報宣伝として、話題性を高められるような作品をつくっていったらな、と思っています。

話題提供資料を拝見させていただきまして、世田谷区の都市農地の多面的機能を活かしたまちづくりのところで、私自身も祖父が宮前区で梨農園を営んでいて、名産である多摩川梨を育てているのですが、都市農地が果たす役割というものはとても大きいものだと感じています。都市農地があることで、子どもたちからお年寄りの方まで地域の幅広い世代が交流できて、自然と会話も生まれますし、地域のつながりが感じられると思っています。多摩川梨を地方に発送される方もとても多くて、地元の名産品を他の地域の方に知ってもらいたい、という地域愛を持った方々が意外にもすごく多いな、と感じています。その中で、都市農業というのは小規模ですので、あまり知る機会が少ないと感じています。農ということについて、まだ知らない方に知ってもらう機会の提供を大事にしていけたらな、と思っています。

当事者の視点から言いますと、担い手不足、人手不足ということがあるので、世田谷区の例にあるように、農業体験などの参加型の取組を行って、都市農業に興味を持つ人を増やしたり、ボランティア活動を促進したりして、人手不足の解消、担い手の育成につなげて、都市農業を次の世代に伝えられる仕組みを作っていけたらなと思います。以上です。

○木村担当部長：

ありがとうございます。都市農業は、川崎のような都市ですと、街の中にあるみどりというこ

とで、我々も大切にしていきたいと思っておりますし、みどり全体いろいろな市民活動が展開されているのですが、担い手不足というところはフェアの一つのテーマとしても挙げたいと思っております。どうもありがとうございます。

市長、若手お二人からの御意見がございましたが、何かございますでしょうか。

○福田市長：

今のお話で、すごく刺さる言葉だと思ったのは、「地域の名産品を贈るという地域愛」ということは、確かにそうだなと。自分たちの素敵なところを知っている人たちというのは、誰かに知ってもらいたい、それを共有したいという思いがあるなと思って。「川崎の名産品って何？」と言われると、意外とみんな困るというのがあると思うのですが、探してみると結構いろいろなものがあって、それが、実は市民の中でもあまり知られていないという。まだまだ開拓の余地がたくさんあって。そういう意味では、それぞれの地域だとかいろいろなものをつなぐというのは今回すごくいい機会になるな、というふうに思いました。ありがとうございます。

○木村担当部長：

ありがとうございます。続きまして、佐土原委員お願いいたします。

○佐土原委員：

佐土原です。御説明ありがとうございます。昨年度の基本構想から、今年度は基本計画に落とし込む、ということの最初のお話だったと思います。

基本構想の懇談会の中で、様々なキーワードが出ていて、例えばグリーンインフラの重要性とかあるいはみどりの多面的な役割を活かしていくとか、そういったキーワードをどういうふうに落とし込んでいくかということ、今これから取り組んでいくことになると思いますが、その時に川崎市の多様な自然環境、あるいは都市との関わりとか、（資料1の2ページに）地図の上で3箇所の拠点を設けるということが書かれていますが、この間をつなぐ自然と全体的な構造とか地域特性がどうなっているかという中に、拠点となる3地区があってそれらが連携していると、そういったことをこれから落とし込んでいく中で、いろいろと理解しながら進めていかれるのがいいのかな、というふうに思います。

それで、協働ということで、いろいろな団体をつなぐというお話がありますが、それぞれの団体がどこでどんな活動をしているのか、自然に対してどんな活動をしているのかということ、大変ですけど、きめ細かく落とし込んで、できれば2024年の開催に向けて、地域の方々と今の段階から一緒に考えていただく、ということで、その最後のステージとしてフェアがある、ということでやっていく。それから、フェアが皆さんの期待とともに開催されたら、それが次の展開でレガシーになっていく。そういった時間経過とともに地域の方々を巻き込んでいく、そのことをこれからどのようにシナリオを書いて具体化していくか、そういったプロセスが大事ななと思って聞いておりました。参考資料1の事例を川崎市のそれぞれの地域特性に合わせて具体化して落とし込んでいくとどうなるのか、ということ、地域のことをよくわかっている方々とともに具体化していくための議論を進めていくことができればいいのではないかなと思っております。以上です。

○木村担当部長：

ありがとうございます。続きまして、鈴木委員お願いします。

○鈴木委員：

鈴木でございます。川崎というと多摩川流域のみどりゾーン、そういったものをいろいろな意味での利活用、より使いやすいとか、よりそこで皆さんが集うという形でいろいろな施策を打ってきたわけですが、昨年、2年ほど前のときもそうでしたけれど、多摩川の流域がすぐ隣にある住宅ゾーンのところまで水が上がってきたということで、私も川崎に生まれ川崎に育ってきた中で、多摩川が決壊を起こすのか、というそんなイメージで皆さんと意見交換をしたことがありました。

また、私も商工会議所では、全国的な意味で、安全で皆さんがそこで集うことができるというようなことを考えながら、熊本ですとか特徴的なところの視察をさせていただきました。多摩川、川崎に限らず全国的に、日頃から安全で楽しめるようなみどり、水といったことを皆さんも考えながら、何十年もの歴史の中で進めてきましたから、引き続き、今回、全国都市緑化かわさきフェアという中で、改めて今までの中で功罪いろいろあったと思うのですが、そういったものを多くの市民の方々と共有して、川崎にあるみどりというものの豊かさを発信できるような形で展開が求められるのかな、というふうに考えております。簡単ではございますが以上です。

○木村担当部長：

ありがとうございます。続きまして、反町委員よろしくお願いします。

○反町委員：

反町と申します。先ほどは詳細な資料の説明をありがとうございました。大変興味深く拝見させていただきました。まずは、私は、昨年度から継続して出席をさせていただいている中で申し上げているのは、一過性のものではなく継続的に、できるだけ市民の方に広く参加をしていただけるような、そういうフェアにしていきたいという思いがある中で、一つは商店街の対応として、市民の方とのいろいろなかたちの接点というところで、川崎全体で見ても、商店街ほど市民の方と身近に気軽に直接的につながりがあってコミュニケーションが取れる環境はなかなかないと思っておりますので、いろいろなことをやっていくうえで、ぜひ商店街というものを活用していけたらいいのかな、というところです。先ほど、名産品の話が出ましたが、川崎市全体としてオスメの食物だったり、技術などを使って大事にされているものがある中で、みどり、緑化、自然というワードにつながるものも多くあるかと思っておりますので、ぜひ活用していければいいなというのが一つであります。

先ほど、紹介いただいた参考資料1「話題提供資料」の中のシンガポールの事例についてですが、手を入れる前と後の写真を見ると大工事をした印象なのですが、これはすごく面白いなと思っています。こういう大掛かりなイベントの場合、手間暇をかけて大きな規模でやっても「自分には関係ないわ」という方が一定数いらっしゃると思っていて、これは、私の本業がイベント関係なこともあって、というところなのですけれども。今回は、本当に多くの方に関わりがあるであろうみどりということで、まさにシンガポールの例にあるように、もともとはそんなにみどり

の印象がなかったところでも、多くの人が目にするような、あるいは普段それこそ毎日のように通っている場所、使っている場所、そういう場所をどこか決めて、こういう形でガラッとイメージを変えろというのはすごくインパクトがあって、緑化フェアの一つの趣旨を満たすものにもつながるというところで、それをこういう時代ですから、広く SNS とかそういったもので発信していくことで、皆さんの目に触れることで話題に上がり、そして、こういう空間を作るということは、皆さんの憩いの場にもなるのかな、と。こういう場所をどこか一つ、一つじゃなくてもいいのですが、決めて、こういう形で、この機会に素敵な空間というものを川崎に作っていただけたらすごくいいのではないのかなと思いました。以上です。

○木村担当部長：

ありがとうございます。続きまして、田代委員お願いします。

○田代委員：

田代と申します。今年度から参加ということで皆さまよろしく申し上げます。

農協といたしましては、今回この緑化フェアというのが、ぜひ川崎の農業を皆さんに知っていただける場として、上手く農業と緑化フェアをコラボといいますか、マッチしたような形で進んでいければいいなと思っております。

私どもは、地域農業振興計画として、5年間の計画を掲げておりまして、その中でも、目指すべき姿ということで、都市農地の多面的機能の発揮ということを掲げさせていただいております。これにつきましては、非常に緑化フェアの内容とマッチしてくるのかな、というふうに思っております。柱の中でも「農へのふれあい」という点で、農業体験の機会の創出ですとか、市民が農にふれあう場の提供ということで掲げておりまして、ここでも3箇所、生田緑地、等々力緑地、富士見公園を予定ということで書いてありますけれども、こういった公園の農的利用ということを、この緑化フェアをきっかけに進めていけたらいいのかなというふうに思っております。

先ほどのお話の中にありましたけれども、多摩川梨は、川崎が有名な産地になっているのですが、宅配がメインというところもあって、市民にまだまだ知られていない。逆に言えば、約150万人いる市民の方にもっと農業を知っていただく機会になればいいかなと思っております。また、中原ではパンジーですとか、資料にもありましたが、宮前では馬絹の花桃が有名な産地となっております、これも、ほとんど市場に出ているということで、市民の皆さんに触れるというよりは市場を経由して違う場所に行っているというところもありますので、ぜひこういった機会に川崎の農家の皆さん、頑張っている方もいっぱいいらっしゃいますので、ぜひ川崎市内産のものを活用した何かができる就非常によいかなと思っております。以前市民150万人突破したときの市民祭りの中で、パンジーを使った花苗アートという企画をさせていただいたことがあるのですが、そういったものを活用して市民の方に花とか植木に触れていただく、見ていただくといった機会になればいいかなと思っております。以上です。

○木村担当部長：

ありがとうございます。続きまして、萩原委員お願いします。

○萩原委員：

とてもよくなっていると思います。このメンバーのいろんな発言が、本当にちゃんと活かされているなと思っています。すごく苦勞されたと思いますけれども、ありがたく見させていだきました。これから、基本計画の策定に向けてさらに具体的に入っていくところが難しいかなと思いますけれども、この参考資料1「話題提供資料」も、各地のいろいろな取組が、農業だけではなく工業とかいろいろな角度から、みどりのことに取り組まれているのが、仕組みとして残っていることが素晴らしいと思うので、今まで、川崎市がパラムーブメントとして取り組まれたのと同じように、今回、グリーンムーブメントになるように、どれだけの人たちを巻き込めるかというのが勝負かなと思いますし、それがみんなの気づきになって、みどりが嫌いな人は誰もいないと思うんですね、本当に宗教とか政治とか関係なく本当にみどりを好きだと思う方は多いと思うので、武蔵小杉の高層マンションの方々なんて本当にみどりを欲していると思うし、その近くに本当に豊かな農地があるという、本当に貴重な都市農家さんが頑張っているというところが分かれると土地の魅力とか力ですね、川崎ってこんなに素敵なんだ、と思ってくれて、自分もみどりを大事にしようということと、持続可能ということはものすごく大事なことだと思います。

その後に、環境がよくなって、川崎が素敵になってというところにつなげる仕組みを、基本計画の中に、どこまで落とし込めるかというところが勝負かなと思いますので、すごく楽しみであるのと同時に、先ほど商店街のお話があったと思いますが、私も観光協会という立場で出ていますけれども、横浜でもやっているみたいに、ホテルとかレストランでも緑化フェアのような取組の逸品みたいな取扱いがあって、それが地図に落とし込まれて、どこから来たとか、地図を見ながら、みどりを楽しみながらお店のごはんやケーキを食べるとか、そういう仕組みでみんなが盛り上がるというなと思っておりますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

○木村担当部長：

ありがとうございます。続きまして、涌井委員お願いします。

○涌井委員：

ありがとうございます。拝見してですね、非常に狭隘（きょうあい）な公園緑地行政、そういう枠組みの中に閉じ込んでいたのがですね、大変幅広になったな、というふうに思いますし、また同時に、ブラッシュアップされたことに対して敬意を表したいと思います。

私が、非常に気になっているのが、2024年が今であるということを前提にして、今何をしなくてはいけないのか。つまりバックキャスティングですね。2024年に向かってフォアキャスティングしていくのではなくて、2024年という年がどんな年になるのか、ということを、神様ではないので想像できないとおっしゃるかもしれないけれど、実は今非常に大きな文明の転換期なのです。

この資料の中に、見事にその点が書かれているのですけれども、おそらくポストコロナ、ネイチャーベースドソリューション、要するに、自然を改めて資本財として考えて、それをどのように尊重するかという社会構造を作らざるを得ない、そういう時代が来ると思うのですよね。

それから行政もですね、今までのようにピラミッド型の行政ではなくてですね、地域にコモンズのようなものができている。自らの課題は、できるだけ自らが解決していく。行政はその幹事役になる、というような方向がたぶん明確になってくるのではないかと。コモンズを形成する上

での動機に、花やみどりというのは、先ほど市長がアンケートについて例示されていましたが、非常にアクセスがいいものですから、これがそういう方向につながっていくのではないかと。

みどりにはご存じのとおり、存在効用と利用効用があって、これから基本計画をつくっていく上で非常に難しいのは、全市的に展開するといったときに、緑化フェアという形でどのような印象を残すのか、という方法論、それから哲学をどうマッチングさせるか、というのが非常に難しいところなのですね。全市的に展開するのは巻き込み作業で非常にいいと思う。ただ一方で、散漫となる、拡散、混乱、といったことが予想される。したがって、ここをしっかりと分けて、市民自らが自分の地域に対して、どういう行動を取ったらいいのか、先ほど、どなたか今からそれをするべきだとおっしゃっていましたが、そういう運動体とか行動形態というのは、存在効用に非常に資するものだと思うのです。ご存じの通り、我々自分自身が、もう既に気候変動で、局所化、集中化、激甚化という3つの要素の中で苦しんでいる。これに一体どう対応すべきか。そこで、グリーンインフラという一つの答えが出てくる。一方、食料難が来るだろうということが農水省の考え方の中に、新たに有機農業の展開だとか、今まで着目されていなかった奥山だとか中山間とか、ここで兼業を営みましょう、などということがいわれてきている。

存外ですね、ものすごい勢いで変わろうとしている、文明の転換期、ネイチャーベースドソリューションに向かって、そういう部分については、市民の皆さんが、緑化フェアを目的にして、どんどん行動していただいて、グリーンコモンズみたいなものを作っていく。それが会場で中間報告されて、やがてレガシーにつながっていく、こういう算段ができる。

一方、みどりが楽しくて、我々にとって日常のライフスタイルを変えていくのだよ、というところを現実的な空間の中にどう展示していくのか。それから、7つの区と3つのコア、1つのセンターを作らないと、その辺のネットワークのコントロールが上手く出来ないのではないかと心配している。その辺りを基本計画上でどう出していくか、これからの腕の見せどころではないか、と思っている。非常に中身は優れている。

この中でぜひ着目してもらいたいのは、今、無価値だと思っているものが実は価値がある。無価値の価値化ということはどういうふうに考えていくか。これは、民間資本や行政がやるものではなくて、先ほどの農産物のこともありますように、地域であればこそ分かる、という「らしさ」というものである。そこにスポットライトを当ててみると、ものすごく価値があるではないか。

こういうことはぜひ市民サイドにお願いをしていく。存在効用と利用効用の分け方と、散漫にならないようなネットワークをどうやって作っていくか、同時にそれを運動体としてのレガシーとしてどう残していくのか、ということが課題だなと思っています。以上です。

○木村担当部長：

ありがとうございます。今非常に重たい課題を頂戴しましたけれど、まさしくおっしゃっていただいたようなことは、しっかりと考えていきたいと思っております。

それでは続きまして、和城委員お願いします。

○和城委員：

和城です。よろしくお願いいたします。

今、全体としてのムーブメントをどう作るのかは難しいなと思いながら皆さんの意見を伺って

いて、今思いついたことをお話します。川崎は自治体としてカーボンゼロを打ち出していて、カーボンゼロを打ち出している自治体は他にもあるのですが、実際問題どうやって具体的な取組をするかという、なかなか難しいところがあって。ましてや行政、自治体の範囲でどうしようかという難しいところだと思うのですが、たまたまだとは思いますが、このタイミング（2021 年）で「2050 年のカーボンゼロ」を打ち出したときに、今から 4 年後の 2024 年に緑化フェアがある。川崎の場合は、工業地帯があり、緑地といわれる地区があり、そこが一体感を出すのになかなか難しいと思うのですが、もともとカーボンゼロとは、排出した二酸化炭素をどこで吸収するか、緑地の部分で吸収してもいいし、反対に電気自動車とかカーボンニュートラルをしっかりと公共、工場に目が行きがちなのですが、もうちょっと効率的な、地球ほど広域ではなくて、自治体という川崎市ぐらいの広域なところでカーボンゼロを考えていく、と今思いつきました。

こうした中で、緑化フェアをレガシーとして、文化として、というふうに皆さん狙って頑張っていると思うのですが、やはりフェアをやったからといってそれが何かになるというのではなく、この場合カーボンゼロの、僕ですら生きているかどうかという 2050 年がそもそもの目的ですし、そうすると 2100 年、10 年後、30 年後、50 年後、100 年後というふうにゴールを設定するような形の、フェアの中でそういうゴールを設定して、そこに向けて皆さん何をやっていくか。あなたの住んでいる川崎は、こういう形でカーボンゼロに貢献している地域。川崎市には大きな工場がありますが、工場自体もよくなっているし、どうやっていこうかみたいところを、川崎市で考えるのは、頭の体操というか単なる数の遊びになってしまう可能性もあるかもしれないけれども、身近に感じていく中で、子どもたちなり何なりが、教育とかをやっていく中で 50 年後に目標を設定していく、という機会にできたらいいのかな、と思いました。ただ、全てはもうちょっと表現は考えなくてはいけないと思うのですが、カーボンゼロチャレンジを大きなテーマとしてもいいのでは、と思いました。

○木村担当部長：

ありがとうございます。続きまして、渡辺委員お願いします。

○渡辺委員：

ありがとうございます。皆さんから多様な意見が出されていますが、私は首尾一貫、プロセス、仕組み、これが勝負です、ということを申し上げて、今回、そこが反映されている。問題は、今まではどちらかというと主催者が提示をする、あるいは単なる出展、あるいは見るだけ。そういう時代はもう終わっている。ですから、市民協働、企業もどう参加をするか。その仕組みが全てだと思います。この仕組みが出来ないと、単なる言葉遊びになってしまう。そこに川崎市がチャレンジする。ここはどういう形の仕組みがいいのか徹底的にやらなくてはならない。

ただ、参画してもらわないと意味がない。おそらく実行委員会が出来たときに、参画共同体の部署を一つ作るわけです。出展課とかそういう感じではなく、そこは担保する、責任もってやる組織を作らないと、片手間では絶対できないと思います。手間はかかれど、次のレガシーということ、あるいは次の事業につなげていくという思いがあるのであれば、そこは思いに沿ってやっていかないと地域愛にならないのですよね。

ただ、今回見た中でそういうものも見られますので、それをどう集約していくかということが大切。それから、緑化フェアをどこまでの皆さんに呼びかけるのか。川崎市民の皆さんは当然、あと近隣、もう少し遠距離の方とか、なかなか川崎に足を運ばない方とか、例えば先ほど話に出た都市農業の方に新しい発見をしていただくときに、誰にそれを訴求するか。マイクロツーリズムではないけれども、ある種の勧誘性を、全国都市緑化かわさきフェアをきっかけに作るかというのをやってみてもいい。

それから、どうしても川崎は日帰りになってしまって、川崎ステイはどうしても難しくなってしまう。でもこれをきっかけに、川崎にミニステイ、ショートステイしてみませんか、と。そこにいろいろなプログラム、体験プログラムとかそんなことをしていく、地産地消のものとか。単に日帰りというのではなく、そういうことを考えてもいいのでは。そうすると、どれぐらいの集客数をみて、客単価をどうするか。事業計画はこれからだと思うけれど、そのあたりを反映させたらいいのではないかと思います。

おそらく我々のライフスタイルがコロナ禍を通じて、先ほど、涌井先生がおっしゃっていたように変わっていく、そこに生態系としてのグリーンインフラ、それから人間性尊重のヒューマンインフラと、デジタルインフラをどう案配するか？また、その三位一体をどのように組み合わせていくかを、考えた方がいいかなと。デジタルというとどこまで踏み込んでいいのかというのがあるが、単なる手法だけではなくて、何か残す。ビッグデータも含めて、そのあたりのことも考えて。例えば、チケットングもそうですよね、発券するのをデジタルチケットング、デジタルパスポートにするというのを検討されるのもいいのかなと。そして、個人情報管理の下、行動履歴を取る等。有効活用になるよう、もろもろチャレンジしていただければ、と感じました。以上です。

○木村担当部長：

ありがとうございます。各委員から一通りお話を頂戴いたしましたけれど、ここで市長、何かありましたらお願いいたします。

○福田市長：

それぞれの立場から素晴らしい御意見をいただき、本当にありがとうございます。

一つ、川崎市でシティプロモーションということでいろいろ取り組んでいるのですが、普通、シティプロモーションというとはですね、ほとんどの自治体は人口減少なので、我がまちに来てください、というふうに自分たちの魅力を対外的に発信することを目的としているのですが、当市のシティプロモーションというのは実はまったくそっちではなくてですね、インナープロモーションというか、市民に向けて行っているというのが他の自治体と圧倒的に違うのです。そういう意味ではまだ人口も伸びているし、だけど、川崎としての一体感、あるいは川崎市民としてのシビックプライドというものがある他の都市と比べてどうだろう、と。地理的に横浜と東京に近いということもあって、川崎の南部と北部というのも人的交流が非常に少なく、そういう形で他都市とは全く違うということが特徴だと思います。

その中で、今回の緑化フェアは、全国都市緑化フェアなので、市外の皆さんに川崎の取組、先進性だとか都市の中のみどりとはこういうものだよね、こういう関わり方があるよね、といった

ことを示していくことがすごく大事だと思うのですが、一方でシティプロモーションもやっているように、私たちの川崎ということについて改めて気づく、と。先ほど、涌井先生の無価値の価値化というお話がありましたけれども、一見日常的なものを、どうやっていろいろな形のつながりでもって価値あるものにしていくか。それはものであったり、文化的なものであったり、人との新たなグループであったり、そういうものにつなげていかなくはいけないな、というふうに思っています。反町委員、田代委員からもいろいろ御意見をいただいたと思うのですが、フェアというものがあるって、その前段階から始まっている、ということがすごく大事だなと思っていますし、フェアが終わったら終わり、ではなくその先ということを常に見据えておかなくはいけない、ということをお客様からの御意見で改めて決意をしているというところです。

それから、池田委員のSDGs、脱炭素の取組と今回の緑化フェアのみどりとの関わりをどのように数値化していくのかというのは、ものすごく大事な御指摘だと思います。地球温暖化対策の取組というのはスタンドアローンでは絶対あり得ないわけで。そういった意味で、川崎市のSDGsのゴールは、脱炭素に向けた2030年の目標にCO2をさらに100万トン削減する目標を上乗せしたのですが、それが、今回どういうふうに位置づけられているのか、関係しているということも市民の皆さんに発信していかなくはならないと思っているので、そこは、あまりテクニカルになり過ぎていいかと思うのですが、市民の皆さんに分かりやすい形で、みどりというものが環境にいいのは知っている、だけど、どういうふうに？どこまで？ということをお、なるべくわかりやすい形で示していく必要があるかな、と思いました。ありがとうございます。以上です。

○木村担当部長：

ありがとうございます。

福田市長から、一通り委員の皆様の御意見を承った上でお話をいただいたところですが、ここからは少し自由な形で、今の市長の発言でも結構ですし、各委員からの発言でも結構ですが、そうした方面に対しての御意見、御質問、補足等ございましたらお話いただけませんかでしょうか。

それでは涌井先生お願いいたします。

○涌井委員：

今、市長がおっしゃったことは本当にその通りで、私の印象では、川崎は通り過ぎるまちで、一生の中で終えるまちではない、というのが現状ではないかという気がするのです。それはもちろん土着というか、都市農業などに勤しんでいる方は別だし、代々ここで商業活動をしている方ももちろん別なのですが、圧倒的多数というのはですね、一時的に川崎に来て、終の棲家は別の場所を見つけて行く。これを早く定住性を高めるようにしたい。そうすると、川崎が持っている様々な物理的な条件以上にコミュニティの力、あるいは地域の自然の持つ力というのに着目して、やっぱりいいよね、という方向にどう押し戻すかということがすごく大事で、そのきっかけにこの緑化フェアを戦略的に使えるなら非常にいいかなと感じます。ただ悩ましいのは、おそらくこれからますますマルチハビテーションの時代になっていくだろう。でも、せめてここが定住の場所だと、税金はここに落としていくよ、とそういうぐらいの気持ち、持続性というのは単なる環境型持続性だけではなく、ここで暮らしていくということについての持続性をどうやって確認できるのか、というところも、私は川崎のいろいろなところに関わらせていただいている中で、

常に念頭にあるテーマではないかな、という気がします。以上です。

○木村担当部長：

ありがとうございます。他に何かございませんでしょうか？

○渡辺委員：

さっきの仕組み、取組をしっかりと作ると、なかなかこれが大変で、口で言うのは簡単、逆に言うコミュニケーションの力がものすごく大事ですよね。普段やっているかもしれないけれど、よりお互いに知り合える。さっき価値の話もあったけれども、そこで言い合う。言い合うだけではなく、それを形にしていく。時間はかかるのですが、それをコーディネーション、ファシリテーションする人が要るんです。そのあたりについて、川崎市は進んでいるのかお聞きしたい。結局、誰がそのあたりを上手くケアしているのか。言い合いはいいのだけれど、勝手連になってしまふとまずいので、そういうコミュニケーション上のファシリテーションを手を挙げてやってもらうこともあるし、それをきちっと出来るような体制が絶対必要だと思う。

そのあたりの川崎市の事情はいかがでしょうか？

○福田市長：

先生のファシリテーションというのは、誰がどこに対して、という意味でしょうか？

○渡辺委員：

例えば、何かやりたいテーマがあった時に、みんな集まってくる。その時に、進行をしっかりと実行し、一つの成果を出せるコーディネーターがいないと形にならない。目標を決めてどうアウトプットするか。そういう担い手も仕組みの中には必要だと思います。ワークショップとか、そういうことに通常慣れている方はそういうことは日常的にやっているけれど、これが一般市民になったとき、あるいは企業の方が入ってきて一緒に協働するとか、大学との連携とかの場合、

私は、大学の中で産学公連携をやっていますが、そういうときこそ、ファシリテーションし、何をを目指すのかを明確にしていかないとバラバラになってしまう。

○福田市長：

意外とですね、この5年間ぐらいというのは、市役所の仕事というのでファシリテーションのような研修が非常に多くて。各区の取組だとか、いろいろなコミュニティが集まると、意外と役所の人間がファシリテーターを務めることが多くなってきていて、ワークショップもすごく多いですし、そういう意味では、それを担える人材というのは、この5年間で役所の中でもものすごく増えていると思います。当然、民間のファシリテーションを専門にしている企業の皆さんに参加いただくこともありますし、住み分けのようなことはやっている感じですかね。

○渡辺委員：

川崎市の場合は、慣れているというか、まあインフラですよ、ヒューマンインフラはある程度いけそうですか？

○福田市長：

市民の皆さんが活動に参加してくださるときは、意識の高い市民の方が多いので、まとめていただけますか、とお願ひしても本当に上手くやっけていただいている。私が見ている限りで言うと、どこの場に行っても市民の皆さんの能力が高すぎて、上手くいっているのではないかと思います。後は、どこにゴールセッティングを持っていくか、ということをや所のゴールセッティングがまづかったり、というのはありますけど、基本的には民間と市民の皆さんと私たち役所の中の役割分担でファシリテーションだとかコーディネートは比較的上手くやれているのではないかと。

○渡辺委員：

素晴らしいですね。他の自治体はなかなかそう上手くいってはいないところが多いので、それは有効な担い手だと思います。

○福田市長：

今の木村担当部長のほか、課長、係長というのも、そのあたりは得意な人材がついているというふうに私は理解しております。

○渡辺委員：

分かりました。ありがとうございます。

○木村担当部長：

そうしましたら、せっかく今日は都市緑化機構から椰野様に来ていただいていますので、椰野様におかれましては、従前から川崎市のみどり関係等を見てきていただいていることもございますので、そうした観点でも結構ですし、あるいは都市緑化機構という観点でも結構なのですが、御発言をいただけませんか。

○椰野委員：

発言の機会を設けていただきありがとうございます。

私も都市緑化機構といたしましては、まさにこの資料に書かれている「緑豊かな潤いのあるまちを作っていこう」というのが、国土交通省も同じですけども、それがやはり大目標でありまして、それに向けて都市の大部分というのは民間の土地です。みどり豊かな都市を作っていくためには、公共だけではできないので、市民の力、企業の力を使って、協力していただいて、全体でみどり豊かなまちを作っていくことを目標にしているわけでございます。

私も国にいたことがあるのですが、そのときから川崎市には大変お世話になっておりました。特に川崎市が自慢していいと思うのは、緑地保全なのですね。最も緑地保全に力を入れている都市になります。それと、もう一つ自慢していいのではないかとと思うのが、例えば、生田緑地とか、市民の皆さんの力が非常に力強いものがあります。こういった川崎市が今まで取り組んできている実績というか、そういうものを、緑化フェアを契機に全地域に広げていくということが出来れば非常に素晴らしいなと思っております。都市緑化機構としても、そういうことにつながるよう

に努力していきたいと思っております。

一つ参考になればと思うのですが、来年、都市緑化フェアを開催する恵庭市、来年の7月に緑化フェアを開催する人口7万人の北海道の都市なのですが、ここで、緑化フェアをやっていただけののですが、この都市が、昨年、「緑の都市賞」で内閣総理大臣賞を受賞しています。市長とお話しをすると、内閣総理大臣賞を受賞したのは市ではなくて市民のほうだと。実際、街はガーデンシティで、それを支えているのがほとんど市民の方です。市民の多くの方はガーデナーなのです。会場もかなり出来てきているわけなのですが、花畑は、ほとんど市民の方が管理しています。

そういうことで、緑化フェアの会場、またサブ的にまちの中にもあるのですが、これはもし機会があれば一度御覧になっていただければと思うのですが、まちが本当にガーデンになっています。それは市がやっているだけではなくて、市民が個人的にそういうことをやっているまちです。そういうことが一つのヒントになりますけれども、川崎市が同じことをやろうとしても人口規模が違うので難しいとは思いますが、将来のイメージといいますか、みどり豊かなまちというのはこういうことなんだな、というヒントにはなるかと思います。ぜひ来年の緑化フェア、その前に熊本でも行いますけれど、そういった先に開催した事例などもぜひ資料に御紹介いただければと思います。他の緑化フェアでも、既にいろいろな取組を行ってきておりますので、ぜひ参考にさせていただければと思います。以上です。

○木村担当部長：

ありがとうございます。それでは時間も残りわずかになってまいりましたが、最後に何か御意見等いただける方おいでになりますでしょうか？

反町委員、お願いします。

○反町委員：

市長のお話と、涌井先生のお話をお伺いして、とにかく川崎のシビックプライドについて私も川崎生まれ川崎育ちなので強く思っているところでございます。ですから、涌井先生に「川崎は通り過ぎるまち」と言われて、悔しい気持ちになったところもありまして。そうならないように、市外の方にも、川崎は、住める、暮らせる、素晴らしい街と思ってもらえるようにしたいと思います。そういうところで、このフェアでとにかくどれだけの人を巻き込めるのかということで、本当に私の周りにはシビックプライド、川崎に強い思いを持っている方、実際に街のために、川崎のために尽力している、素晴らしい民間の方、市民の方、そして市の職員の方を知っています。そういう方々が全部ひとつになってこのフェアをつくる、そういう仕組み、体制で臨みたいと強く思いましたので発言させていただきました。以上です。

○木村担当部長：

ありがとうございます。時間も限られているところではございますが、国土交通省から野村調整官にお越しいただいておりますので、いろいろな方の御意見、また、川崎市を応援していただけるような御意見も多々いただいたところでございますけれども、概括して何かお話をいただけないでしょうか。

○野村委員：

基本計画としてまとめていくのは資料1の2枚目3枚目だと思うのですが、昨年からかわさきフェアが、市民の取組を最大限生かしていくんだということをこの場でも皆さまに御意見いただいていて、そことのつながりが、例えばこの資料1という協働の精神みたいな枠の中に入っていくと思いますが、今一つ見えづらいと感じました。

一つ考え方としては、川崎市のSDGsの目標やカーボンゼロの目標などいろいろあると思いますが、かわさきフェアの中で、アクセルを踏める目標のようなものを設定し、そういったものに対して取組がはまっていく、というかたちがあるかなと思います。これからみどりに関わる市民の取組内容やフェアの取組内容を落とし込んでいく中で、そういった取組がどう川崎市のSDGsの取組だったり、かわさきフェアの成功につながっていくのか、というところを意識して計画をつくる必要があるのではないかと思います。以上です。

〔(6) その他〕

○木村担当部長：

ありがとうございました。それではお時間も限られておりますので、次第6「その他」に移らせていただきます。

本日、皆様からいただいた御意見等を踏まえ、事務局にて基本計画（案）を策定してまいります。その後10月18日に予定しております第2回懇談会でお示しさせていただき、御意見等をいただきたいと思っております。

今後の懇談会のスケジュールにつきましては、10月18日に第2回を開催し、その後、11月末に基本計画（案）を公表させていただきまして、12月から約1箇月間、パブリックコメントの手続を行う予定でございます。パブリックコメントで市民の皆様からいただいた意見等を踏まえまして、令和4年2月10日に第3回を開催し、基本計画を策定していきたいと考えております。

本日様々な御意見をいただいて、早くから市民の方々を巻き込む仕掛けというものも挙げられていました。そうしたことも同時進行で進めていきたいと思っております。

委員の皆様におかれましては、お忙しい中とは存じますが、引き続き、御協力の程よろしくお願いいたします。それでは、閉会にあたりまして、福田市長より一言申し上げます。

〔(7) 閉会〕

○福田市長：

本日は、お忙しい中、本当にありがとうございました。貴重な御意見を伺いまして、しっかりと計画案の中に組み込んでまいりたいと思います。

今朝、会議で局長から、みどりの活動団体、市内で活動している団体が、国土交通大臣表彰を市内の6団体も表彰を受けると。知事表彰も1団体ということで、みどりの活動を行っている団体、「みどりの愛護」功労者国土交通大臣表彰ということで、里山を守ったり、花壇の手入れを行っていただいたりということで6団体、毎年だいたい2団体ぐらいなのですが、今回は6団体ということになりました。局長曰く、「うちはすごく活動団体が多いので、弾がいっぱいある」と。それこそ、まだまだいっぱいあるぞと。それだけ参加していただいている方がいっぱいいるとい

うことは、川崎市にとって大きな財産だというふうに思っています。

先ほど、涌井先生から「コモンズ」というキーワードが出ましたが、みどりについて、というのは、非常に誰もが親和性が高いもの、つながりが作りやすい、という特徴を持っているというふうに思いますので、みどりに関係のない人など誰ひとりいない、ということを考えれば、どういう仕掛けでもって日常に転換していくのか、ということをお伺いした御意見をもとに計画の中に練り込んでいきたいな、というふうに思っております。

先ほどお褒めいただいた、緑地保全に力を入れているということで、実は、佐土原先生に2週間ほど前に、環境審議会の会長を務めていただいているので、今回新たに2箇所選定を、特別緑地保全地区に指定するというふうな話で答申をいただいたのですが、本当にそういった市民の皆さまの御理解もあって確実に進んでいるな、と。このこと自体も、市民の皆さまが知られていないということもありますので、ちゃんと伝えていくということが愛着になり、シビックプライドになっていくんだ、というふうに思っていますので、この会議だけでも、すごいプレイヤーが集まっている、というふうに思いますので、しっかり活かしてまいりたいと思います。

本当にありがとうございました。

○木村担当部長：

それでは、以上をもちまして、「第1回全国都市緑化かわさきフェア基本計画懇談会」を終了いたします。

本日は、お忙しい中、貴重なお時間をいただきましてありがとうございました。

以上